

言語意識の問題 ～ アイルランド英語の “Irishness” と “Bad Grammar” ～

嶋田珠巳

キーワード：言語意識、アイルランド英語、文法形式、主観評価、アンケート

要旨

言語形式に対する話者の意識について、アイルランド南西部で得たデータをもとに考察する。文法・語彙形式に対する意識調査における、おもに “Irishness” と “bad grammar” 評価の相関の有無を検討しながら、アイルランド英語話者の「アイルランドらしさ意識」(awareness of “Irishness”) と「スタンダード意識」(awareness of “Standard”) の二つの意識に関して例証する。本稿では、集合的に文法形式にたいする意識をみた場合の傾向を示すことに加え、地域、年齢、および話者の志向性から調査データの個人差の検討も試みる。

1. はじめに¹

言語意識は言語事実と区別される。意識の問題は言語学においてどちらかといえば本質的ではないことがらとして扱われるのがふつうであるのだが、言語現実の考察、とくに言語変化を考えるならば、言語事実とともに言語意識をみることも恐らく重要なことである。

言語変化の要因はおおきく言語内的要因と言語外的要因に分けて考察されることが多い。そこでいう言語外的要因とはもっぱら、社会の変化、すなわち当該の言語がおかれているコミュニティの状況変化のことであろう。しかしながら、たんに「社会の変化」というだけでは分かり得ない問題が残る。それがどのようにして言語に影響を及ぼしうるかについての考察がそこには不足している。

本稿は、言語変化の外的要因の、言語体系に直接的に働きかける要素として話者の意識を想定し、その最初の考察として、言語形式に対する話者の意識がどのようなものであるかについて、アイルランド南西部で得たデータをもとに検討する。アイルランド英語話者にあると考えられる「アイルランドらしさ意識」(awareness of “Irishness”) と「スタンダード意識」(awareness of “Standard”) の二つの意識 (Shimada 2006 など) の関係性について、

¹ 本稿の出発点は、言語変化を考えにいた言語記述ないし文法研究はいかにして可能かといった観点からの拙稿筆者の学位論文 (*Grammatical Description of Hiberno-English from a Dynamic Perspective: A Sociolinguistic Approach*, 2007年, 京都大学) での関心である。本稿で中心的に検討する “Irishness” と “bad grammar” の相関性に関しては、2008年度言語学演習「アイルランド英語話者の文法諸形式に対する意識」(東京大学言語学研究室) における発表といただいた質問内容をもとにしている。

“Irishness” と “bad grammar” の指標による主観評価データをもとに考察する。² すなわち以降の考察は、二つの意識がどのように関連しているのかといった関心において、アイルランド的であることは即ち正しくないことを意味するのかあるいは意味しないのか、話者による違いはないのかといった問いに答えるためのものである。

2. 2006 年の調査

2.1. 調査方法および回答者

2006年6~7月にアイルランド南西部のコーク (Cork City) とリストール (Listowel Town) の2地域でアンケート調査を実施した。コークは人口およそ1.2万人のアイルランド第二の都市、リストールはコークの北西およそ110kmに位置する人口4千人の町である。回答者数は64、その内訳はリストール38名(男性20名、女性18名)コーク26名(男性9名、女性17名)である。年齢はそれぞれ、15~78歳、13~80歳。職業欄には、学生、経営者、店主、退職者、販売員、教員、主婦、図書館員、工場勤務、運転手、自営業、警備員、鉄道員、保姆、秘書、俳優、療法士、画家、ボランティアなどが記入された。

アンケートはフェイスシート(1頁)、第I部:文法特徴と話者意識に関する質問(2~3頁)、第II部:日常生活および志向性に関する質問(4~7頁)から構成された。本稿ではおもに第I部を分析および考察のためのデータとして使用するが、5.2節では第II部のデータを参照する。アンケートは一部ずつ封筒に入れ、無記名で行った。アンケートの半数以上は、言語調査のために以前から協力を得ているキー・インフォーマントを中心にして配布(事前説明を含む)、回収された。それ以外は、地域ごとに年齢および職業などの社会的属性になるべく偏りがないようにする配慮から、リストールとコークの両地域にて自身が直接お店やデパート、図書館などで協力を依頼して回答をいただいた。

² ある言語形式がなんらかの社会的範疇(らしさ)に関係づけられるとき、その範疇は当該コミュニティにおいて意味をもつものとして機能している要素と関わりがあると考えられる。筆者は現地における参与観察と言語観に関する1999年の調査から、そのような要素が「アイルランドらしさ」(“Irishness”)と「スタンダード」(“Standard”)にみとめられるのではないかと考えてきた。アイルランドの言語をめぐる歴史的背景を基礎とした社会言語的母体のうえで(Shimada 2007b)、そのようなメタ言語的な要素も含んだ言語コミュニケーションがたえずおこなわれていると考えられる。Awareness of “Irishness” が実際にアイルランド語に由来するかどうかによらず話者にとって「アイルランドらしさ」を感じさせるという意味であると同様、awareness of “Standard”というときの「スタンダード」は、規範文法として実体をもつ「標準」とは区別された話者における概念上の存在物である。アイルランド英語話者は言語調査の際、とくに文法性の判断を求めているわけではないときでも自発的に“bad grammar”という言い方で「間違い」を指摘する。スタンダードな言語に対する意識はアイルランドに限ったことではないが、英語が本来的に自分たちの言語ではないことが話者のawareness of “Standard”をより顕在化させていると考えられる。アイルランドにおいて英語は「学ぶ言語」「教わる言語」として、さらに言えば「目標言語」として入ったものであり、その認識は現代の話者にも見受けられる。

2.2. 調査内容

回答者は 26 の文のリストから「自分が用いる」「用いない」「理解できない」「悪い文法である」「アイルランド的である」と思うものを自由に（数の指定なく）挙げるよう求められた（末尾に資料 1：回答シートを参照のこと）。26 文は以下の A~J の 10 項目から成り、アンケート用紙においては配列を工夫して番号を付した。これらの文は Dolan (1999), Filppula (1999) などによりこれまでに挙げられているアイルランド英語の特徴をもとにして、リストールの劇作家 John B. Keane (1928-2002) の作品の文例を参考に作例し、事前調査を行って修正を加えたものである。³

A. Unmarked sentence

(a) She takes three plates from the cupboard.

B. Non-canonical constituent order

(b1) From the cupboard she takes three plates.

(b2) Taking three plates she is.

C. Cleft(-like) sentence

(c1) It is from the cupboard that I take three plates.

(c2) 'Tis lovely she is.

(c3) It is lovely that she is.

D. *There...* sentence

(d1) There's no one can deny it.

(d2) I knew there was good news in you.

(d3) There was a great housekeeper lost in you.⁴

E. *Do be V-ing/AdjP* form⁵

(e1) I do be taking three plates from the cupboard.

(e2) She does be lovely with her long hair.

F. *Be after V-ing/NP* sentence

(f1) I am after taking three plates from the cupboard.

(f2) Tom is after his supper.

G. So-called perfect sentences

(g1) They are visiting here many years.

(g2) My sons have visited there for many years.

H. Cliticisation

(h1) We'll visit here tomorrow.

(h2) The two of us'll take three plates from the cupboard.

(h3) You've the name of a good employer.

³ 例えば Keane の劇作をもとにした (a) 'She takes three plates from the dresser. が含まれていたが、事前調査の段階で回答者の注目が文法形式よりも dresser という語彙に向けられることがわかった。「Irish」的な文化的背景を連想させる dresser の使用を避け、実際の調査では (a) She takes three plates from the cupboard. を用いた。ちなみに「what we would say」として挙げられた文は (a'') She took three plates off the press. (Listowel, born in 1950s, male)であった。

⁴ この文は、アイルランド英語において、上手に家事仕事をこなす人に対して褒め言葉として使う表現である。

⁵ E・F・G 群に関しては 4 節で取り上げている。

(h4) Amn't I like a scarecrow?

(h5) 'Twouldn't be a good thing.

I. "Non-standard" usage

(i1) She take three plates from the cupboard.

(i2) She been taking them home ever since.

(i3) I asked for today's special and she putting plates on the table.

J. Lexical items⁶

(j1) How's the craic?

(j2) That amadán put eggs in my bag.

(j3) Don't be cnamhshealing!

2.3. 調査結果の概観

本調査は社会的関与性を含めたアイルランド英語の文法記述のために、少数のインフォーマントによる内省調査を補う目的でおこなった。⁷ アンケートは左頁に質問項目を配し、右頁のリストから文例を選ぶ方式のものであり、多くマークされた文例の文法特徴はそれだけ話者の意識において有標 (marked) であると考えられる。「使用」・「不使用」・「アイルランド的」・「悪い文法」の合計マーク数が最も多かったのは語彙項目 (j1) (j2) (j3) (n=86, 73, 78) と *do be* 形式 (e1) (e2) (n=89, 85) であり、少なかったのは (g2) *have* 完了 (n=21)、縮約形の (h1) *we'll* (n=30), (g1) *be V-ing AdvP* のパターン (n=29) であった。⁸

2.2の文リストにあるHEの文法諸形式は話者意識において平坦ではなく、「使用/不使用」の報告において一定の傾向をもっている。相対的にみて、「使用」評価のたかい項目には語彙項目の *craic* (j1)、F群 *be after* 文、*there...文* (d1, d3) があり、G群「完了」表現、H群縮約形使用が概ねそれに続く。⁹ 逆に「不使用」評価は、E群 *do be* 形式が極めてたかく、B群有標な語順、C群分裂文とその類似文、I群非標準とされる用法に比較的多くみられる。

「悪い文法」評価が最も高かったのが *do be* 形式 (e1, e2)、つぎに三人称単数 *s* の欠如 (i1) であり、逆に少ないものには、語彙項目の *craic* (j1)、*amadán* (j2)、*have* 完了 (g2) であった。また「アイルランド的」評価が最も高かったのが、上位から順に *amadán* (j2)、*cnamhshealing* (j3)、*craic* (j1) である。語彙項目の評価が際立っていることが特徴的である。

⁶ *Craic* は「楽しみ、面白いこと」、*amadán* は「ばか、あんぼんたん」、*cnamhheal* は「文句を言う」の意味。(j3) は *be V-ing* 形で否定命令が表された、アイルランド英語に特徴的な表現である。語彙の表記は John B. Keane の作品における用例および Dolan (1999) を参照した。

⁷ Shimada (2007a: Chapter 5) は言語調査と 2006 年のアンケート調査に基づき、それぞれの形態・統語法上の文法形式が話者にどのように意識されているかを記述している。

⁸ 各項目のマーク数を (n=x) で表す。ここでは、話者の意識における有標性をみるのが目的であるので、明確に番号を記入しているもののみをカウントし、例えば「すべて」「Q1 以外すべて」「Q2 と同じ」などと書かれているものについてはカウントしていない。3-4 節において相関性を見るときには、文ごとの判断として展開しているためカウントして数え直している。

⁹ (a) の「使用」評価および (i1) の「悪い文法」評価がたかいのは、これがそれぞれ文リストの 2 番目と 1 番目にあり、配布時の説明の際に例題のようにして、いわゆる三人称単数 *s* のない 1 番目の文との比較がなされたことが関係していると考えられる。情報構造の表出に関する文法特徴に関しては文脈なしでの判断が「不使用」評価の一因となったことが考えられるが、VP fronting の文 (b2) では「使用」評価が皆無であり「不使用」評価が *do be* 文についてたかいことなどは検討されるべき点であるように思われる。

3. 主観評価の相関

アンケートの回答は「使用」「不使用」「悪い文法」「アイルランド的」だと思うものの番号をリストアップする形で与えられている。各質問の回答から話者の文ごとの判断を見ていく形でデータをいったん展開し、その評価項目における分布をここで明らかにしておきたい。すなわち、ある人のある語彙・文法形式の判断でどのような意識項目が共起しやすいかをみるのがここでの目的である。

たとえば、回答者 A の回答用紙に文番号 1 が「使用」と「アイルランド的」の 2 項目にのみ記入されているとき、以下の表の [+use/-non-use] と [-bad/+Ir] がクロスするセルに 1 が加えられる。そのようにして、64 人の回答者の 26 文に対する判断 (すなわち 1664) を表内のセルに振り分け、その数を数え上げたのがつぎの表 1 である。

<表 1>

	[-bad/-Ir]	[+bad/-Ir]	[-bad/+Ir]	[+bad/+Ir]	
[-use/-non-use]	605 (36.4%)	78 (4.7%)	127 (7.6%)	19 (1.1%)	829 (49.8%)
[+use/-non-use]	237 (14.2%)	4 (0.2%)	92 (5.5%)	0 (0%)	333 (20.0%)
[-use/+non-use]	202 (12.1%)	154 (9.3%)	101 (6.1%)	36 (2.2%)	493 (29.6%)
[+use/+non-use]	5 (0.3%)	1 (0.1%)	3 (0.2%)	0 (0%)	9 (0.5%)
	1049(63.0%)	237 (14.2%)	323 (19.4%)	55 (3.3%)	1664 (100%)

26 の形式それぞれに対して逐一「使用」「不使用」「悪い文法」「アイルランド的」の是非を問うのではなく、その 4 項目に対して意識にのぼるものをリストアップする形で回答が与えられているため、ある文がどこにも記入されない割合は少なくない (全体の 36.4%)。<表 1> は全体の分布的傾向をしめしたものであるが、たとえば +use/-non-use と -use/+non-use の行をみることによって、「使用」報告のうちの 7 割 (237/333) が「アイルランド的」と「悪い文法」のどちらともリンクしないのにたいして、「不使用」報告に関しては 31% (154/493) が「悪い文法」評価とのリンクをしめしていることがわかる。

以降ではとくに「悪い文法」と「アイルランド的」の相関 (3.1) および「アイルランド的」と「使用/不使用」の相関 (3.2) についてデータを集計し、検討したい。

3.1. 「アイルランド的」と「悪い文法」の相関をみる

つぎの<表 2>は、<表 1>のなかから「アイルランド的」と「悪い文法」に関わる項目の百分率を抜き出したものある。

<表 2> 「アイルランド的」と「悪い文法」

	+ Irish	-Irish	total
+ bad	55 (3.3%)	237 (14.2%)	292 (17.5%)
-bad	323 (19.4%)	1049 (63.0%)	1372 (82.4%)
total	378 (22.7%)	1336 (77.2%)	1664 (99.9%)

<表 2>から、例えば、この 2 項目のすくなくともどちらかにマークしているものが全体の 36.9% (n=615) であり、そのうち「アイルランド的」でありかつ

「悪い文法」であるもの (n=55) は 10 分の 1 にも満たないことが読み取れる。

総じて、<表 2>からわかるように、+/-Irish と +/-bad の間には明確な相関はみられない。¹⁰ したがって、「アイルランド的」と「悪い文法」とは互いに独立していると考えられる。¹¹

3.2. 「アイルランド的」と「使用/不使用」の相関をみる

<表 1>にあらわれないことがらからまず検討しておきたい。マークの総数の最も多い、語彙 *craic* の例はわかりやすい指標となるであろう。以下の<表 3>は (j1) に関して該当する項目にあたる回答者数を示しているが、(j1) は「悪い文法」評価が皆無であることが特徴的である。

<表 3>

(j1) How's the craic? [Lexical item]

(j1)	マークなし	Bad Gramma	Irishness	Bad かつ Irish	sum
マークなし	7	0	10	0	17
Use	12	0	29	0	41
Non-use	1	0	5	0	6
sum	20	0	44	0	64

「アイルランド的」評価は全部で 44 あるが、そのうち 29 は「使用」、5 は「不使用」、10 はどちらの評価もしていない。「使用」評価の内訳に目を配れば、「アイルランド的」はその 7 割にのぼる。*Craic* の例から言えるのは、「悪い文法」評価がなく「アイルランド的」

¹⁰ カイ 2 乗検定をしても、5%の有意水準で有意差が見られなかった(林徹先生のご教示による)。

¹¹ 表にあらわれない部分に関して補足する必要があるかもしれない。一人以上の回答者が「アイルランド的」と「悪い文法」のどちらにもマークした文は 21 あり、多いものから E 群 *do be* 形式 (n=8, 9)、(c2) *'Tis lovely she is.*、(h4) *'twouldn't*、(h5) *Amn't I* (すべて n=5) であった。「アイルランド的」と「悪い文法」の両方にマークのある回答者は全部で 16 人いたが、この二つの報告が完全一致をしめす回答はない。このことから「アイルランド的」と「悪い文法」の相互の独立性は支持される。

であるものは「使用」の報告におもむく傾向があるが、回答者によっては「不使用」の報告をすることもあるということである。¹²

つぎに、<表 1>のなかから「アイルランド的」と「使用／不使用」に関わる項目の百分率を抽出して集計した<表 4>をみておきたい。<表 4>では、回答者が「使用／不使用」のいずれかの評価を与えた場合について整理している。

<表 4> 「アイルランド的」と「使用／不使用」

	+ Irish	-Irish	sum
+use/-non-use	92 (5.5%)	241 (14.4%)	333 (19.9%)
-use/+non-use	137 (8.3%)	356 (21.4%)	493 (29.7%)
sum	229 (13.8%)	(35.8%)	826 (49.6%)

ここで興味深いのは、+Irish、-Irish の合計の列をそれぞれみた場合に、その上段と下段、すなわち、+use/-non-use と -use/+non-use の比率がほぼ均

等であることである ($[+use/-non-use] / [-use/+non-use] \times 100$ は左から 66.2, 67.3, 64.3)。すなわち、「アイルランド的」であるかどうかは、それを単独の指標として「使用／不使用」の評価に影響していないことがわかる。

さらに、「悪い文法」評価のない語彙項目 *craic* の例では「アイルランド的」であるものは「使用」の報告におもむくのにに対して、<表 4>では「不使用」評価が「使用」評価に対して優勢であるという傾向が確認される。<表 1>の +bad/-Ir の列を見ることにより、「悪い文法」評価のうちのおよそ 3 分の 2 が「不使用」評価とリンクしていることも確認できる。

以上の検討により、(i) 「アイルランド的」と「悪い文法」は話者において独立した指標であること、(ii) 「悪い文法」評価は「不使用」評価と相関がある一方で、「アイルランド的」評価は「使用／不使用」の評価に相関していないことがわかる。

4. 文法形式に対する意識

2.3 節でみたように「使用／不使用」報告は文法形式ごとに一定の傾向性をもっているが、4 節においてはその傾向性について、とくにテンス・アスペクト形式に焦点を絞ってみていく。「使用」ないし「不使用」に加えて、「アイルランド的」「悪い文法」評価との相関も検討する。

¹² 「不使用」を報告する 5 人のなかには、F 群 *be after* 文, *there...* 文 (d1, d3) に関しては「アイルランド的」かつ「使用」だが C 群 *cleft(ic)*、E 群 *do be* 形式に関しては「アイルランド的」かつ「不使用」であると報告する回答者 (born in 1950, Cork, male, teacher, 大卒, speak Irish-yes)、この回答者と重なりをもつが C 群に関して c1, c2 (c3 については「不使用」報告のみ) では「使用」を報告する回答者 (born in 1952, Listowel, male, manager/farmer, 大卒, speak Irish-yes)、26 文すべて「アイルランド的」で (f1) のほかは使用しないとする回答者 (born in 1965, Cork, female, manager, 大卒, speak Irish-rarely)、「アイルランド的」なものは「不使用」になることはあっても「使用」になることがない回答者 (born in 1947, Listowel, male, 鉄道員, 高卒, speak Irish-yes) が含まれる。「アイルランド的」かつ「使用」を報告する 29 人について回答傾向を一括りすることはできないが、そのうち 23 人は語彙項目以外にはその報告がない。

4.1. テンス・アスペクト諸形式

アイルランド英語のテンス・アスペクト体系には、アンケートに使用した以下の文例にあらわされる諸形式が含まれる。

(e1) I do be taking three plates from the cupboard. [*Do be Habitual*]

(f1) I am after taking three plates from the cupboard. [*Be after Perfect*]

(g1) They are visiting here many years. [*Be V-ing AdvP (durative) pattern*]

(g2) My sons have visited there for many years. [*Have Perfect*]

(e1)・(f1)・(g1) は標準英語にはみられないアイルランド英語の形式であり、(g2) は標準英語の ‘They have visited here for many years.’ に相当する完了の意味をもつとされてきたものである。¹³ (f1) はホット・ニュース完了の名で知られる *be after V-ing* 形式、(e1) は習慣相を表示する *do be* 形式である。(g2) の *have* を用いた完了形式は (g1) の *be V-ing AdvP (durative)* パターンおよび (f1) の *be after* 完了などの他形式との機能的対立が認められ、アイルランド英語のテンス・アスペクト共時体系の一部を成すものである。

4.2. 評価傾向に関するデータ

嶋田 (2007) はアンケートに含まれたテンス・アスペクトに関して検討し、アイルランド的・標準的といった話者の意識との関連において文法形式の有標／無標性が明確にとらえられることを示している。¹⁴ 本稿ではさらに、「使用／不使用」と「悪い文法」／「アイルランド的」の各評価項目どうしの関係を (e1)・(f1)・(g1)・(g2) それぞれ表に示し、それぞれの文法形式が話者の意識において明確な違いをもってとらえられていることを明らかにしたい。¹⁵

(e1) の表より、*do be* 形式では「不使用」と「悪い文法」の評価が際立ち、それらがリンクするところで最多数を集めていることがまずみてとれる。ほかに、「不使用」のうち 75%

¹³ Shimada (2010: 168-172) はこの標準英語文の表す意味範囲がアイルランド英語文 (g2) に一致しないとしている。

¹⁴ その内容は、(i) アイルランド英語話者の意識において *be V-ing AdvP (durative)* パターンと *have* 完了は比較的無標であるのに対して、*do be* 形式と *be after* 形式は有標である、(ii) *be after* 形式は当該言語話者に好まれる形式、*do be* 形式は好まれない形式であることを中心とする。

¹⁵ 同一文が「使用」と「不使用」に入ることがふつうはないと想定されるが、実際には (g1) のように両方の欄に書き入れられていることがある。そのため表に「Use かつ non-use」を入れた。Irish, Use などに関しては、おなじ列／行にある他のものにはマークされずそれのみであることを表す。例えば、表の「Irishness」は +“Irishness”/−“Bad Grammar”を指す。なお、これらはデータ分析のためにエクセルを用いてそれぞれカウントしたものであり、回答の段階でクロス表のセルに対応した分類が与えられているわけではない。

が「悪い文法」、25%が「アイルランド的」、12.5%がその両方の評価を報告していることなどが明らかになる。

(e1) I do be taking three plates from the cupboard. [Do be Habitual]

(e1)	マークなし	Bad Grammar	Irishness	Bad かつ Irish	sum
マークなし	9	9	1	3	22
Use	2	0	0	0	2
Non-use	5	25	5	5	40
Use かつ Non-use	0	0	0	0	0
sum	16	34	6	8	64

対して、(f1) にみる *be after* 形式は比較的たかい「使用」評価と、「悪い文法」および「アイルランド的」とはリンクしない「使用」評価にその特徴がある。「アイルランド的」とするもののなかに「不使用」とともにマークされることがないことが表において明らかとなる。

(f1) I am after taking three plates from the cupboard. [Be after Perfect]

(f1)	マークなし	Bad Grammar	Irishness	Bad かつ Irish	sum
マークなし	24	0	5	1	30
Use	18	1	6	0	25
Non-use	3	4	0	2	9
Use かつ Non-use	0	0	0	0	0
sum	45	5	11	3	64

さらに (e1) と (f1) の相関表の比較によって、どちらも「アイルランド的」評価は14であるが、*do be* 形式ではその過半数が「悪い文法」評価にも含ま

れ大多数で「不使用」の報告がなされるのに対して、*be after* 形式では「悪い文法」評価が少なく「使用」の報告がされる傾向にあることがわかる。

つぎの (g1) に示される *be V-ing AdvP (durative)* のパターンは、これが標準英語などとの対照によりアイルランド英語の特徴であるとされているにもかかわらず、話者意識においてはそのように認識されていない点で注目される。当該言語の「特徴」として記述されることのない (g2) *have* 完了であっても「アイルランド的」の回答数が6である一方、特徴として記述される (g1) が7と差がない。

(g1) They are visiting here many years. [Be V-ing AdvP (durative) pattern]

(g1)	マークなし	Bad Grammar	Irishness	Bad かつ Irish	sum
マークなし	37	2	2	0	41
Use	7	1	2	0	10
Non-use	6	3	2	0	11
Use かつ Non-use	1	0	1	0	2
sum	51	6	7	0	64

話者の意識にのぼりにくい、すなわち意識において比較的無標であるという点においてはつぎの (g2) にみる *have* 完了も同様であるのだが、*have* 完了のほうが「使用」報告におもむき、「悪い文法」評価が極めて低い点で異なっている。

(g2) My sons have visited there for many years. [Have Perfect]

(g2)	マークなし	bad Grammar	Irishness	Bad かつIrish	sum
マークなし	40	0	3	0	43
Use	12	0	2	0	14
Non-use	5	1	1	0	7
Useかつnon-use	0	0	0	0	0
sum	57	1	6	0	64

これらテンス・アスペクトに関わる4つの文法形式が話者の「使用」「不使用」「悪い文法」「アイルランド的」の評価およびその相関に関する分布において違いを示していることが上表の比較により明らかとなる。

4.3. 評価項目の相関

テンス・アスペクト4項目の「使用/不使用」報告と「アイルランド的」「悪い文法」の評価の関連について、ここでまとめておきたい。

- (i) 語彙項目 *craic* のようにつよい“Irishness”を意識させるが“bad grammar”ではない場合には概して「使用」報告を導き、逆に *do be* 形式のようにつよく“bad grammar”を喚起する場合には「不使用」報告を導く。
- (ii) *Be after* 完了のように比較的“Irishness”を意識させるが“bad grammar”でないと判断されるときには「使用」報告におもむく。
- (iii) *Have* 完了や *be V-ing* などとくに“Irishness”も“bad grammar”も意識させない場合には「使用/不使用」を報告しない傾向にある。

5. 主観評価の個人差

4節にみたように、それぞれの文法形式の主観評価は回答全体をみることによって傾向を出すことができる。その一方で、回答者一人ひとりの回答が完全に一致を示すことがほとんどないのもまた事実である。本節では主観評価の話者による違いに目を向ける。世代と地域による回答傾向の違いについて5.1で検討し、5.2において話者の志向性との関連において検討を試みる。

5.1. 世代と地域

2.1で述べたように、アンケートはなるべく幅広い年齢層の人に記入してもらう形でリストールとコークの2地域で実施した。この2つの地域は文法形式の意味に関する共有の知識を根拠として同一の言語コミュニティに属していると考えられ、コークとリストールは人口および街の景観などによりそれぞれ都市部と農村部という区別が可能である。レズリー・ミルロイは「言語変化と急速な方言混合 (dialect mixing) は都市方言に見られる一般的特徴なので (Labov 1972: 300)、都市のデータを周辺地域の対応するデータと比較すれば、

その形成の過程に関する洞察が得られるのは納得のいく仮説だと思われる」(太田他訳 [該当箇所官治訳] 2000: 132) と述べているが、コークとリストールのデータを比較することによってなにかみえてくるものがあるかもしれない。¹⁶

当該の2地域ごとに、「使用」「不使用」「悪い文法」「アイルランド的」「不使用かつ悪い文法」「使用かつアイルランド的」「不使用かつアイルランド的」「悪い文法かつアイルランド的」にあたる協力者のデータを生まれた年によりソートしてその傾向をみたところ、全体的な地域差として、コークの話者に「不使用」報告が多く、リストールではその報告が少ないことがわかった。たとえば、リストールの1937年以降の話者に完了に関する文法形式である (g1) (g2) について「不使用」報告が皆無であった。その一方で、「悪い文法」評価についてはコークとリストールで大きな違いがみられない。¹⁷

世代差と地域差という観点から興味ぶかい観察が得られたのは、「アイルランド的」評価および「悪い文法かつアイルランド的」の分布である。とりわけ、1976年以降生まれのコークの話者は一部 *be after* 形式に「アイルランド的」を報告しているのを除けば、テンス・アスペクト項目に関しては「アイルランド的」評価がない。これは語彙項目が概して、世代、地域を問わず「アイルランド的」評価がたかいたとは対照的である。*Do be* 形式はコークの若い世代ではその割合が減るものの、2地域ともほぼ「悪い文法」としてとらえており、「不使用」の項目も似た傾向をしめす。ところが、リストールの1935年以前生まれ、1960～1980年生まれ、コークの1976年生まれ以降の話者は *do be* 形式に「アイルランド的」評価を与えることがなかった。二地域の傾向を比較して傾向をみるには回答数が十分とはいえないが、都市部の若い世代では「悪い文法」と「アイルランド的」評価が重ならないことが確認できた。¹⁸ このようなデータは言語形式に対する言語外的意味の変化を考えるためのひとつの手がかりになるように思われる。

5.2. 話者の志向性

2006年の調査には第II部として「日常生活および志向性に関する質問」を20問付した。これは話者の属性に加えて話者の志向性や考えを知ることで、一つにはどのような話者がどのような文法形式をどのようにみなすかについて詳細なデータが得られると考えたため

¹⁶この2地域において大きく差が出たものに *Amn'íl*~? (2.2節 (h4) の文) がある (Shimada 2007, Chapter 5, 5.5.7)。

¹⁷このようになにか「悪い」かについての意識が共通である一方で、「不使用」報告に差がみられるのは、実際の言語使用に対する内省を反映してのこととらえられるかもしれない。とはいえ、*have* 完了、*be V-ing* の形式はどちらも実際のコーパスに使用が見られるので、無意識的な言語行動と意識のうえでの判断に違いがあることも考えられる。

¹⁸アンケートに含まれた二つの *do be* 形式のうち的一方または両方において「悪い文法」と「アイルランド的」評価が重なるものは11あったが、コークの1940～1990年代生まれの話者にはこの二つの評価が重なることがなかった。リストールでは世代に特徴的な分布はみられなかった。

であり、さらには言語変化の方向性（当該調査においては、どのような言語形式が廃れ、どのような形式が残るのか）に関する考察の手がかりになるのではないかと考えたためである。

現時点においては話者の志向性と回答傾向について明確な相関を見いだすに至っていないのだが、これまでの検討事項をここで整理しておきたい。

(i) 話者の回答の一致が大きいものとして、教育の質問項目があげられる。アンケートの質問項目「教育は子供にとって重要か」に対する回答は、すべてが肯定回答であり、「自分の子供(自分自身)にはどのくらいの教育レベルが必要か」に対しての回答は、大学 (n=58)、専門学校 (n=1)、高等学校 (n=1, 'minimum' と但し書き)、その他 (n=2, 'depends', 'professional') であった。アイルランドの当該コミュニティにおいては、年齢、性別、職業、学歴などの属性によらず、概して教育に関する志向性がつよいことが分かる。

(ii) 話者の回答が分かれたもののひとつに、質問項目「こどもが出来たら、アイルランド名をつけますか」がある。肯定回答 40、否定回答 19、無回答 3 という結果であった。しかし、この質問項目に肯定の回答を寄せたグループと否定の回答を寄せたグループの間に、文法形式に対する回答傾向において顕著な違いは確認できなかった。

(iii) 「アイルランド英語だと思う表現を書いてください」という質問の次に設けた「その表現を使いますか」という問いに関して、肯定回答 34、否定回答 6、無回答 22 という結果であった。この質問項目において、否定回答者に共通の文法形式に関する回答傾向は確認できなかった。

(iv) 文法形式に関する評価を尋ねる質問項目に対して、4つ以上の文を挙げている回答者を、「アイルランド的」なものに書かれている文法形式が (a) すべて「使用」の欄に書かれている文法形式と一致する回答者 (n=1)、(b) すべて「不使用」の欄に書かれている文法形式と一致する回答者 (n=5)、(c) 「使用」の欄に書かれている文法形式と「不使用」の欄に書かれている文法形式に分かれる回答者 (n=7) について、属性と志向性をみた。それぞれをグループとしてみた場合に、年齢、職業、学歴による違いは顕著に見られないが、調査地域とアイルランド語を話すかどうかの違いが見られた。(b) のグループにはリストール(コークと比較して農村部)の回答者がいなかったのに対して、(a) のグループはリストールの回答者、(c) のグループは7名中リストールの回答者が3名という結果であった。また、(c) のグループではアイルランド語を比較的話すと報告しているのに対して、(b) のグループは平均的にあまり話さないと報告した(「話す」を4、「ときどき話す」を3、「めったに話さない」を2、「話さない」を1としたときに、全回答者の平均値は2.75、コークの回答者の平均2.76、リストールの回答者の平均2.75; (b) のグループでは2.60、(c) のグループでは3.29)。データは小さいものであるが、都市部の話者およびアイルランド語をあま

り話さない話者は、農村部の話者でアイルランド語を比較的話す話者に比べて、自分たちの意識においてアイルランド的であると思うものを使わないとしていることがわかる。

ここで (b) のグループの話者に注目したい。このグループの話者は、アイルランド的なものを使用しないようにしているのであろうか、あるいは“Irishness”に対して否定的な態度をとっているのであろうか。このことを複数の質問項目を通してここで検討しておきたい。質問項目「あなたの英語にはアイルランド語から来ている部分があると思うか」に対しては、5名全員が肯定回答、「アイルランド人はアイルランド語を学ぶべきだと思うか」については肯定回答4、否定回答1、もっと多くの人がアイルランド語を話すようになればいいと思うか」については肯定回答3、否定回答1、その他1(‘no desire it would be nice’と記入)、「子供ができたならアイルランド名をつけたいか」に対しては5名全員が肯定回答という結果であった(理由欄にはそれぞれ、‘Patriotism’, ‘Did do. connection with my culture’, ‘Preserve Irish tradition’, ‘I suppose this would be due to family tradition’, ‘sense of identity in this world of globalisation’¹⁹と記入があった)。さらに「どんな表現をアイルランド英語だと思うか」「前の間で挙げた表現を使うか」では後者に対して、(b) のグループの全有効回答者(4名)が肯定回答であり、表現には‘What are you after doing?’ ‘Time- half past (four)’ / ‘He’s after going home (meaning ‘he’s gone home’)’ ‘I am living here with ten years’ ‘I will go out’ (rather I shall go out), I wouldn’t go there at all (meaning ‘never’ or ‘rarely’)’ / ‘How the craic’ ‘Any news?’ ‘She’s inside in Roches Stores’ / ‘The craic was good (craic-Irish)’, ‘I hope you’re in heaven before the devil knows you’re dead.’¹⁹などが挙げられた。これらの結果は、文法形式の主観判断においてアイルランド的なものがすべて不使用に含まれるからといって、自らの言語のなかのアイルランド的要素を否定しているわけではないことを示している。否定するというよりもむしろ、客観的に使用/不使用の判断を示し、より正確に回答しようという協力的な態度が文例判断の結果であったのかもしれない。志向性に関するアンケート結果を概観しているかぎりにおいては (b) のグループだけに特別な要素は浮かび上がってこないのだが、話者の志向性をみるための質問項目において話者の内面や考えをすこしでも知ることによって、言語形式に対する意識調査の回答にだけ依って誤って導く恐れのある予測を回避できる利点があるかもしれない。

¹⁹ これらのうち *craic*, *be after* はアンケートの主観判断対象の26文にも含まれた形式である。文法形式が含まれていてもその表現そのものを使わないと「不使用」に入れることがあるかもしれない。母語話者を前にした言語調査のばあいにも、たとえば、なにをもって非文の判断が導かれているかについて話者の文法知識が多層的であることを考えに入れた精査が必要であるが(嶋田2009)、アンケートの回答にみられるこのような事例は、調査の際の質問のしかたおよび調査者と協力者のインタラクションにも示唆を与えているように思う。

6. おわりに

本稿においては、2006年に行ったアイルランド英語の文法形式に対する意識調査の概要を示し、おもに“Irishness”と“bad grammar”評価の相関性について考察した。意識項目の相関について、「アイルランド的」と「悪い文法」評価の独立性、および「悪い文法」評価と「不使用」評価の相関性、「アイルランド的」評価と「使用／不使用」評価の非相関性が明らかになった。これらは話者の二つの意識 (awareness of “Standard” / “Irishness”) をそれぞれ独立したものとして考える論拠となる。

さらに本稿では、集合的に文法形式に対する意識をみた場合の傾向を示すことに加え、調査データの個人差をみることも試みた。そのような差ないし違いが何を原因として生じているのかについて本稿は明確な結論を導くに至っていない。話者の志向性がどのように言語意識と関わっているのかについて、今後一つひとつデータをみながらの検討が必要である。「XがYの原因である」というとき、そのXをただ一つの質問項目の回答によって説明づけることは困難であるにしても、このようなアンケート調査の結果を有意義なものとして示すためには、複数の項目結果を束にしたなんらかの要素でもって説明することが必要であるように思われる。「一つの要因で説明しようと焦らず、いくつかの回答を組み合わせることで回答者の内面に迫る」(林 2010) ことを試み、検討を重ねたい。

参考文献

- Dolan, Terence Patrick ed. 1999. *A Dictionary of Hiberno-English: The Irish Use of English*, Gill & Macmillan, Dublin.
- Filppula, Markku. 1999. *The Grammar of Irish English: Language in Hibernian Style*, Routledge, London.
- 林徹. 2010. 「ベルリン・クロイツベルクでのアンケート調査」, 第1回東京移民言語フォーラム, 東京大学駒場キャンパス.
- Labov, William. 1972. *Sociolinguistic Patterns*, University of Pennsylvania Press, Philadelphia.
- Milroy, Lesley. 1987. *Observing and Analysing Natural Language: A Critical Account of Sociolinguistic Method*, Blackwell, London. [太田一郎・陣内正敬・宮治弘明・松田謙次郎・ダニエルロング訳 2000. 『生きたことばをつかまえる 言語変異の観察と分析』松柏社].
- Shimada, Tamami. 2006. Awareness of ‘Standard’ and ‘Irishness’: motives for change in contemporary Hiberno-English, presented at *Sociolinguistic Symposium 16*, University of Limerick.
- Shimada, Tamami. 2007a. *Grammatical Description of Hiberno-English from a Dynamic Perspective: A Sociolinguistic Approach*, 京都大学大学院文学研究科博士論文.
- Shimada, Tamami. 2007b. “Irishness” in Hiberno-English: Linguistic hybridism and

ethnolinguistic identity, in Eric A. Anchimbe ed., *Linguistic Identity in Postcolonial Multilingual Spaces*, Cambridge Scholars Publishing, Newcastle, 285-309.

嶋田珠巳. 2007. 「アイルランド英語話者の Socio-linguistic Awareness—テンス・アスペクト形式にみられる有標／無標性」, 『社会言語科学会第 20 回大会発表論文集』, 118-121 頁.

嶋田珠巳. 2009. 文法知識の多層性—アイルランド英語話者の文の容認判断に関する社会言語学的考察, 『社会言語科学会第 23 回大会発表論文集』, 120-123 頁.

Shimada, Tamami. 2010. *English in Ireland: Beyond Similarities*, Keisuisha, Hiroshima.

資料 1 回答シート

(Questionnaire 2006, Part I: awareness towards morphosyntactic forms)

< A3 用紙左頁 >

From the sentences (1) to (26) on the opposite page, please choose the ones that apply to the following five statements.

You may choose as many as you like. If you think there is no relevant number, please fill the bracket with "Nothing". Any of your comments are welcome.

Question 1:

Which sentences do you think you would **use yourself**?

Your answer: []

Your comment:

Question 2:

Which sentences do you think you would **not use** on any occasion (including when you are talking with your family and friends)?

Your answer: []

Your comment:

Question 3:

Which sentences can you **not understand the meaning of**?

Your answer: []

Your comment:

Question 4:

Which sentences do you think have **"bad grammar"**?

Your answer: []

Your comment:

Question 5:

Which sentences do you think show **"Irishness"**?

Your answer: []

Your comment:

<A3 用紙右頁>

- (1) She take three plates from the cupboard.
- (2) She takes three plates from the cupboard.
- (3) I am after taking three plates from the cupboard.
- (4) From the cupboard she takes three plates.
- (5) The two of us'll take three plates from the cupboard.
- (6) I do be taking three plates from the cupboard.
- (7) It is from the cupboard that I take three plates.
- (8) Taking three plates she is.
- (9) I asked for today's special and she putting plates on the table.
- (10) How's the craic?
- (11) You've the name of a good employer.
- (12) They are visiting here many years.
- (13) There's no one can deny it.
- (14) She does be lovely with her long hair.
- (15) 'Tis lovely she is.
- (16) It is lovely that she is.
- (17) Amn't I like a scarecrow?
- (18) We'll visit here tomorrow.
- (19) 'Twouldn't be a good thing.
- (20) There was a great housekeeper lost in you.
- (21) She been taking them home ever since.
- (22) Tom is after his supper.
- (23) That amadán put eggs in my bag.
- (24) Don't be cnamhshealing!
- (25) My sons have visited there for many years.
- (26) I knew there was good news in you.

“Irishness” and “Bad Grammar” in Hiberno-English Speakers’ Awareness

Tamami Shimada

shimada@human.kj.yamagata-u.ac.jp

Keywords: socio-linguistic awareness, Hiberno-English, grammatical forms, subjective judgement, questionnaire

Abstract:

This paper examines speakers’ awareness towards linguistic forms based on a survey conducted in southwest Ireland. The data underpins the working assumption that speakers of southwest Hiberno-English are aware of what are regarded as standard patterns of speech and of the linguistic characteristics which may represent Irishness; the former is referred to as ‘awareness of “Standard”’ and the latter is ‘awareness of “Irishness”’. Particular focus of the discussion is laid on the subjective judgements of “Irishness” and “bad grammar” and their relationship. The paper concludes the general independency of the two indexes, while it considers discrepancies of the judgement among speakers in terms of the place of residence, age and their attitude or orientations.

(しまだ・たまみ 山形大学人文学部講師)